

【宗祖法然上人御法語】

(第六)五劫思惟

1

酬因感果の理を、大慈大悲の御心の内に思惟して、年序そらに積もりて、星霜五劫に及べり。

阿弥陀様は修行を重ねて仏になるという中で、「それでは修行もままならない衆生を救うにはどうしたらよいか」と大いなる慈悲の御心を思い巡らすうちに、年月はいたずらに流れ、気が付けば五劫という途方もなく永い時間が過ぎ去っていました。

2

然るに然巧方便を廻らして思惟し給えり。

しかしながらそこで、この上なく巧みな手だてを駆使して、さらに次のように思いを巡らされました。

3

然も、「我れ別願をもて浄土に居して、薄地底下の衆生を引導すべし。

「我は別願を立てて浄土を建立し、何の取り柄も無くもがき苦しんでいる衆生を必ずや救い導こう。」

4

その衆生の業力によりて生まるといわば、難かるべし。

そうは言っても、愚かな衆生が浄土に往生することなど出来ようはずもない。

5

我れ須く衆生のために永劫の修行を送り、僧祇の苦行を廻らして、まんぎようまんぜん善の果徳円満し、自覚覚他の覚行窮満して、その成就せん所の、万徳無漏の一切の功德をもて、我が名号として、衆生に称えしめん。

だからこそ我はそうした衆生のために永き修行を重ね、永き苦行を積んで、あらゆる修行、あらゆる善行の功德をまつとうし、自ら覚り他を覚らしめる仏道を究めたならば、この身に具わった完全無欠の全ての功德を、我が名号に込め、これを衆生に称えさせよう。

6

衆生もし此れに於いて信を致して称念せば、我が願に依えて生まるることを得べし。

もし衆生が信心を發して、この通りに我が名号を称えれば、我が誓願に依じて往生することが出来よう。

